

說苑

西洋文明起源論

——スムメル説——

市川 勇

西洋文明の起源については古來色々の臆説論争が行はれてゐるが其の中で最も顯著なものはスムメル起源説と埃及起源説の對立である。G. Leonard Woolley 氏はスムメル説を提唱する代表的學者の一人であるが、さきに本誌上新刊紹介した彼の近著 *The Sumerians* の末篇 (*The claim of Sumer*) を今茲に疏譯して、彼のスムメル説の一端を謹聽しやう。——譯者

學界に於ても百年程前まではスムメル人の名さへ知るものがなかつたが、今日に至つてはスムメル人の歴史及び藝術は他の古代民族以上に詳細に判つて來たのである。彼等の歴史は殆んど四千年間これを知るものがなく、その名は西洋紀元以前に最早人々の記憶から消へ去つた。今日吾々が有つスムメル人の知識が單なる好奇心の對象物ではないか、果して古代スムメル人が今日吾々の言ふ如きものであらうか、といふ疑を發せられてもあながち笑ひの限りではない位である。貴重な發見が却て吾々の認識を妨ることが往々あつて、偶然な發見又は其の遺物が非常に優美である爲めに個

人又は民族が史上身分不相應な地位を要求することがある。人間活動の記録や手藝品は吾々の關心を唆るものであるが、しかし斯様なものも闇に埋没せられて、孤獨なものとなり、そこに民族接觸に伴ふ反射作用などを認めることが出来なくなることも稀ではない。文化價值を評價する眞の標準は、該民族が人類文化進化の爲めに如何なる貢獻を爲したか、彼等が文化構成に於て如何なる役割を演じたかを考察することにある。吾々は斯様な態度を以て忘理から救ひ出されたるスムメル民族の文化を評價しなくてはならない。

ウル發掘の最古の墳墓の中には王の墳墓及び珍貴な遺物が澤山あつたが、これらは大略西紀前三五〇〇年前のものである。この年代は明瞭を缺くが、ウル第一王朝を出来るだけ低く見積つて西紀前三一〇〇年とし、從來あつたる大架装な殉死、死者神化等の風習が無くなつて新しい文化層に成る爲めには相當に永い年數を要したものと見積つての推算である。尙ほ、ウル發見の古墳が相互に前後の連絡ある系統に立つものであり、その墳墓の構造、その中から出土した遺物に一連の發展系統が認められ、併もその内で一番新しいものが第一王朝の勃興に止まるとすれば、ウル古墳はその古きものは新しいものとは單だ四〇〇年の差のみではなからう。

さて、これはウルの最初期の墳墓がエデプトの第一王朝より幾分古いことを語るものである。埃及の年代は論争の的となつて居り、従つてメネスが先史時代の二ツの王國を統一した年代について

も色々の異説がある。最も安全と目され且つ大多數の學者が支持する説はこれを西紀前三三〇〇年頃とする。しかしこの説が是認されやうが何うであらうが、埃及とメソポタミアの年代は非常に密接な相關々係にあつて、メネスの時代をもつと古いものと見積る場合にはスムメルの年代ももつと上げなければならず、この兩國間の關係には何等變りがないのである。尙ほ假に兩國の起りにもつと低い年代を適用するとしても、それは大した問題ではなく、兩國の關係には依然變りがなく、ウルの古墳がメネスと同時代若くはもつと古い時代のものであるといふことになるのである。

吾々はウルの古墳中の出土品、フリンダース・ペトリー教授がアビドスで發見した埃及第一王朝の古墳の出土品、及びナイル河谷の王朝以前(先史時代)の文化、それら三者を比較して見なくてはならない。先史時代の埃及文化とスムメル文化とは何等共通點を有しない。埃及に於ては先史時代の藝術とその第一王朝の藝術との間には非常な相違があり、これを系統相違に歸することは困難であるが、其の間に新時代の出現を認めない譯には行かない。この變動は先史時代の末期に現はれ、メネスの時代には最早新時代に入つてゐたのである。從來より言はれてゐることであるが、この急激な轉換は所謂埃及文化なるものの基礎を成したものであり、併もその轉換たるや外國の影響に由るものであり、その文化形象にはユーフラツ河畔の文化と共通なものがある。例へば、迴轉印章、梨形の石矛、格石式の建築の如きは埃及にはほんの一時現れたのみで前後にその類を發見すること

が出来ないが、メンポタミアに於てはこれらは固有のものであり歴史上永く續いてゐる。尙ほこの外に、樂器シストラム——非常に獨有のものでメンポタミアと埃及の兩地で別々に出來た偶然の一致とは考へられない——、石血の形、クロテスクな動物繪、これら物質文明の類似の外に、所謂精神生活なるものにも類似の點があつて、例へばニジプト宗教にはスメル人の神話から出來た要素がある。假りに、文化借授の點に於て二國の孰れが主であり孰れが従であるかといふが如き疑問があるとするれば、斯くの如き疑問は兩國の年代上の優劣が定まつてゐる以上、問題にならないのである。埃及の有史時代はやうやくメネスの時代に遡るのみで、それ以前の時代は暗黒に蔽はれ神々の世である。これに對して、スメルに於ては第一王朝といふものが起つたのは幾千年の永い文明時代が續いた後の事である。この半傳説の太古時代については極く僅かばかりしか知られてゐないがしかしスメル論争を片付けるには充分である。年代上エジプトのメネスより古い、スメル人の古墳出土品を見たる者は何人といはず、その文明が既に廢頽期若くは圓熟期の文明に屬することを認めぬものはなからう。その遺物の製作技術は發達段階の初期に屬するものではなく十分に圓達してゐて、何百年後の製品と區別し難い有様である。殊に冶金術の如きは堂に入つたもので、エジプト人は初期スメル人の斧の如き優秀なものを作つたことがない。輓轡の如きもエジプトには王朝(ピラミット)時代から使ひ出したのであるがスメル人は遙か以前からこれを使用してゐた。メネス

時代のエジプト、スメル兩地の文化を比較すると、スメルの方がエジプトの方より程度が遙かに高く、しかも當時のエジプト文明は未だホヤホヤであるがスメルの方は既に老衰の状態にある。スメル人の發祥地が何處であらうが、その文化は殆んどスメル地方で永い年月の間にその發達を遂げて圓熟したのであり、エジプト文明は外國模倣、外來刺戟に由つて成立したものである。兎も角、エジプトは先史時代の末期に直接に間接にスメル人の感化を受けたのである。

本書に於ても既に述べた通り、チグリス、ユーフラツ兩河地方のみならずシリア、及びタウルス山脈の彼方にまで、スメル人が軍事及び貿易で活躍してゐたのである。従つて、これらの地方はその當初よりスメル文明の洗禮を受けたものといはなければならぬ。一體、文化なるものが民族の消滅と共に絶滅するものとするれば、これら各地に於るスメル人の文化的征服も一夜の夢となつたであらう。ところが實際はそうでない。メンポタミアに於るスメル人の政治的没落が文化にはこれといふ變動を齎さなかつたのは誠に驚くに足る事實である。昔のスメル法は僅かばかりの修正でバビロンの法律となつてゐるのであり、宗教は元の通りであり、バビロン人の神々は依然スメル人の神々であり、ただ其の名をセミチクに改めた位にすぎず、公認を得たセム系の神はなかつたのである。後世スメル人の言語は通用されなくなつたが、スメル文學はセム語に翻譯された。美術に於ても依然スメル流儀が續いた。西紀前八世紀のアッシリア壁畫の如きもスメルを

以て範として居り、その中の人物の如きはウル第三王朝若くは西紀前第四千年紀のスムメル美術を髣髴するものがある。バビロン文明は全部そうであり、アッシリア文明は多少これと差度あると雖も、兩者いづれもスムメル文明に發源したものである。彼等自らもこの事實を告白してゐる。

西紀前四世紀(若くは三世紀)の人であるペロツススの言に據れば、一ツのオアネスに指揮されて半魚半人の種族がベルシャ灣から上陸してスムメルの海岸地方に定住し、文字、農業、冶金等の技術を弘めた。彼は言ふ、「生活改善の爲めに出來た凡ゆるものはオアネスが人に遺したものであり、それ以後には何等發明がない」と。

スムメル人の開いた文明は其の開拓者の没落後も千五百年間嚴存してゐたのであり、その後繼者たるバビロン、エネベはスムメル人の遺産を門外に出さず獨專するやうなことをしなかつた。彼等は覇者で西方地方を支配し、或はただ接觸してゐる内に、先きにスムメル文明の餘光を受けたことのある同地方に更にスムメル文化を注入したのである。最も顯著なスムメル人の發見の一ツである楔形文字が小アジアのヘチ民族に使用され、バビロニア語はシリア、否なエジプト朝廷の外交公用語となり、シリア、カバドキアから出土する廻轉印章はその型體様式より見てメソポタミア發源のものであり、カルケミシユの彫刻は其の源をもとめればアッシリアを通り更にスムメルに遡るのであり、フェニキアの折衷美術のオリエンタルなものはスムメル系に屬するのである。しかし、これ

らはスムメル文化に全く隸屬してゐた譯ではなく、各自の國民性が多少これに加味されてゐる。これらの諸地方が何れもスムメルの感化を受けてゐるが、就中、チグリス、ユーフラツ兩河地方は直系の本場であるだけ、その感化の程度が最も強い。國外の遠地に外れるに従つて感化の度も減つて來る。兎も角、これらの近東民族を通じてスムメル文化は現代の物質文明にまで感化を及ぼしてゐるのである。

此の事實を具體的の例證をあげて説明することは容易でない。第一に、長い系統の連鎖が一々皆わからないのは寧ろ常であり、また、藝術は靜的なものでなく、その根源たるインスピレイション如何に由つて始終變化するのであるから最初のものとの後のものが必ずしも同一の表現を持つとは豫期出來ないのである。一ツの簡單な好例が他の事實を語ることもある。建築物に於るアーチといふのは歐洲に於てはアレキサンダー大帝遠征までは知られてゐなかつた。従つて當時のギリシヤ人と後世の羅馬人はこの異様な建築様式に興味をそゝり、これを歐洲に取り入れたのである。ところが、アーチなるものはバビロニアでは広く知れ渡つてゐたもので、ネブカットネザルのバビロン復興建築(西紀前六〇〇年)によく現れて居り、西紀前一四〇〇年頃のバビロン王クリガルツのウル寺院にもこれが見え、及び西紀前二〇〇〇年頃ウルのスムメル人の私宅の出入口が煉瓦のアーチ造りである。ニツブルのアーチ造りの排水渠は西紀前三〇〇〇年頃のものといはなければならぬ。尙

ほウルで發掘された王族墳墓は天井がアーチをなしてゐるが、これは前者より更に四、五百年の昔に遡るものである。この事實はスメル史の曙光時代から現代に至る、一つの文化系統の推移を示すものである。圓屋根、圓天井も同じくスメル起源のものである。一旦發明されたものは萬世通用され、それに僅かばかりの變更が加味されるに過ぎない。傳統への從續は新工夫をこらすよりは遙かに樂である。彫塑方面に於ても後世諸國へのスメリの影響は多大である。これらよりもつと軸象的である觀念方面に於ては、スメリ人はヘブライ民族を通じて西洋文化の發展に一層重大な貢獻をなした。スメリの開闢傳説、洪水傳説がセム民族に取り入れられ、これらはユダヤ教、キリスト教に影響を及ぼした。ユダヤ人の宗教はその起りに於て少からずスメリ人に負ふところがあり、尙ほ王朝、バビロン移因時代にはスメリの流れたるバビロンの宗教と直接に接觸して、その發達の爲めに得るところが多かつたのである。モーゼの法律はハムムラビ法典と同じくスメリ法から發祥したものであり、従つてヘブライ民族史上始終問題になる社會生活の理想、正義の如きも、ヘブライ人は元それをスメリ人から得たるものである。尙ほそれらの社會理念はキリスト教國に於て理論上(實際上なかつたとせば)日常生活の規範とされてゐるのである。單だ厄介な問題は、全き忘却から最近漸く判つて來たスメリ民族に現代の文化が負ふところある事實を認めることは容易であるが、その程度の問題に至つては評査に苦む。スメリ人は文化上達の點に於て

最上の地位を占めるものではないが非常な名譽を勝ち得るものである。しかし人類史への貢獻の點に於ては、スメリ人は更に高い位置を要求するであらう。彼等は他の民族が未だ草莽ババリズムに居る時にすでに高度の文明にあつた。ギリシヤ人はリディア人、ヘチ人、フェニキア、クレイト、バビロン、エジプトに教をあたぎたるものである。本源はこれらを通り越してスメリにあるのである。スメリ人の、軍事的經略、高度の發達を遂げた工藝、社會組織、道德觀念、宗教觀念は離れなくの孤立した現象でもなく單なる考古學的骨董品でもないのである。吾々の精神的先驅者たる彼等スメリ人は嚴密なる研究を吾々に要求するのである。